

初 年 次 教 育 学 会

ニュースレター 第 5 号

Japanese Association of First Year Experience at
Universities and Colleges

〒921-8501
石川県野々市市扇が丘 7-1
金沢工業大学 藤本元啓研究室内
初年次教育学会事務局
Tel: 076-248-9584 FAX: 076-294-6701
URL: <http://www.jafye.org/>
E-mail: fye-jimu@mlist.kanazawa-it.ac.jp

1. 事務局からのお知らせ

2012 年 9 月の総会での報告事項およびその後のメール・学会ウェブでの周知事項について、改めてお知らせいたします。

(1) 学会設立 5 周年記念として『初年次教育の現状と未来』を刊行いたしました(2013 年 1 月、世界思想社、<http://sekaishisoshaco.jp/> 2,625 円)。昨年度までの学会費を納入されている会員の皆様のお手元には届いているかと存じます。もし未着の場合には転居先不明等で届いていない場合がございますので、事務局までご連絡ください。また、ご所属の機関でも本書をぜひご活用ください。

(2) 紀要への論文投稿資格について 昨年度より論文の投稿は同一年の 3 月末日までに会員になっている方のみに限らせていただいております。2013 年 5 月末日締切で投稿論文を募集している第 6 巻の場合、2013 年 3 月末日までに入会申請がない場合には、論文の投稿は受け付けられません。

(3) 1 大会あたりの報告件数について 2012 年 9 月大会時に初年次教育学会細則の改定が承認されました。その結果、個人会員・機関会員の 1 大会あたりの研究・実践報告数が明確になっております。改正箇所につきましては、下記のファイルをご覧ください。

<http://www.jafye.org/index6/120904saisokupoint.pdf>

(4) 理事会の活動状況について 2012 年度の理事会の活動状況につきましては、紀要第 5 巻第 1 号の末尾をご覧ください。

2. 紀要編集委員会からのお知らせ

2012 年 9 月の総会での報告事項およびその後の状況を追加し、改めてお知らせします。

(1) 学会誌発行時期について 2012 年度の第 5 巻より 2 月末発行となりました。すでに会員の皆様には第 5 巻第 1 号が届いているかと存じます。

(2) 投稿論文の締切について 今回の刊行時期の変更は当該年度の大会情報を掲載するためですので、投稿論文に関する取り扱いは従来通りで変更はございません。従いまして、第 6 巻の投稿締め切りは 2013 年 5 月末日となります。なお自著紹介の投稿締切日程につきましては改めて周知いたします。

(3) 1 巻あたりの投稿数について 2012 年 9 月大会時に初年次教育学会細則の改定が承認されました。その結果、個人会員・機関会員の 1 巻あたりの投稿数が明確になっております。改正

箇所につきましては、<http://www.jafye.org/index6/120904saisokupoint.pdf>をご覧ください。

3. 学会ウェブサイトの更新について

ウェブサイトの基本的フォーマットを更新いたしました。今後も適宜改善を図っていきたいと考えております。掲載すべき行事や情報をお知らせください。 <http://www.jafye.org/>

4. 第6回大会について

第6回大会は2013年9月12日（木）午後～14日（土）お昼過ぎまでの日程で、金沢工業大学で開催されます。地方での開催ということもあり、第6回大会は従来と異なり3日間の日程で行われます。会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

5. 初年次教育学会第5回大会を終えて

文京学院大学
経営学部 教授 新田都志子

昨年文京学院大学で第5回大会を開催させていただき、私も大会理事の一人としてお手伝いさせていただきました。既に半年以上前の出来事ではあるがここではスタッフとして働いてくれた学生たちの様子やその後をお伝えしたい。

大会は経営学部の教員を中心に行ったが、大会を主催するにあたり大きく2つの問題に直面した。一つは本学には理事もおらず、そのうえ教育学系の学会のルールや特長が掴めていないこと、二つ目は当日運営の中心スタッフとなるべき大学院生が少ないことである。前者のルールなどは理事の先生方に教えて頂けるとして、後者はこれまでの筆者の経験から本学で全国大会を行うのは当初無謀のように思えた。

しかも、夏休み期間の開催であること、メンバーを募った7月にはまだ多くの4年生が就活中であり確約が取れないこと、3年生はインターンシップとインナー大会（関東地区ゼミ対抗プレゼン大会）とで忙しく、結局2年生中心のメンバーにならざるを得なかった。

学生達は大会前日に集められ、役割分担を決め責任者の職員から説明を受けてそれぞれ準備をし、大会に臨んだ。受付、誘導、教室係、控室などを分担したが全く初めての仕事であり大いに戸惑ったことであろう。もう少し前に教育をできていたらとも思ったが夏休み中のことであり前日に集めるのが精一杯であった。



私自身は教室の運営に関わっていたので、受付や誘導などを直接指導できずどうなったかと非常に心配していたが、途中途中や終了後多くの先生方に学生スタッフの仕事ぶりについてお褒めの言葉をいただき非常に嬉しく励みになった。

来校された先生方に直接感謝の言葉をかけてもらえた学生も多く、終わってから他大学の先生に褒められたことやありがとうという言葉が投げかけられたことを目を輝かせながら喜んで報告してくれたりもした。外部の方々に直接評価して頂いたことも彼らの大きな励みになったことと非常に感謝している。

終了後に2年生にどういう教育を行っているのかといったご質問もたくさん頂いた。その答えになるかどうかかわからないが、本学の特長であるゼミナールの活動について若干述べたい。本学経営学部では「ゼミナール主義」というスローガンがあり2年次より必修ではないものの95%以上の学生がゼミを選択し活動する。1年生の10月末にゼミの説明会が始まり個別の入室相談やゼミ見学、入室テストを経て12月に入室が決まる。この1ヶ月以上にわたる期間は我々教員にとってはなかなか厳しいものがある。昼休みはほぼ毎日1年生の個別相談に対応し、2週間はゼミを公開しなければならない。しかし、いずれも1年生にとっては極めて貴重な経験であり、この期間に1年生は多くの教員と接触し多くのゼミを見学することで徐々に自分の希望するゼミを絞っていくことになる。



本学に着任した当初は 2 年生からゼミが始まることに半信半疑であった。まだ専門科目も殆ど学んでいない 1 年次にゼミを選択できるのか、2 年生から専門書を読む力があるのかという点からである。

しかし、実際に 2 年生のゼミを持ってみると確かに大変な面も多いが、秋にはそれなりの研究成果を発表できるまでになり、専門を学ぶ楽しさも分かってきて能動的に学習するようになる。3 年次にステップするための助走になっているのは確かである。最近では初年次よりも 2 年次にいかにモチベーションを下げさせないようにするかの工夫が必要との話を聞くが、本学ではゼミ活動のおかげでその点は全く問題がないように思われる。事実、1 年生の時より大学が断然面白くなったと感じる学生が殆どである。

2 年生からのゼミ活動は勉学の面からのみ有効というだけでもない。むしろ 2 年生でゼミ活動を行うことで勉強以外のことにも気づきを与え、大きく人間的に成長する手助けとなっているように感じる。ゼミは経営学部という特長からも専門書の輪読に加え、現実問題の分析を行うためにテーを決めグループ学習を行うことが殆どである。長時間一つのグループで活動することにより、お互いを支えあい、励ましあうという風潮が生まれ、他者に対する気配りが自然とできるようになってくる。グループのメンバーは、異性や留学生、年齢の異なる学生など様々で、これまでの仲良しグループとは異なる。多様なメンバーと一緒に活動することで、最初は戸惑い、時には衝突しながらも何度も話し合いを重ねることで相互理解を深め、活動が終わる頃には一体感が生まれ互いになくてはならない存在になっていることに気づく。また、学部の性格から研究を進める上で企業や社会との関わりを持つことも多く、学生はゼミという活動を通じて、学ぶ楽しさといわゆる社会人スキルを早めに身につけることができるように思う。

もちろん、不足している力が多々あるのは確かであるが、なぜ 2 年生でまがりなりにも大会スタッフとして活動できたのかという点ではゼミ活動による力が大きいのではないかと感じた。

最後に、この大会を通じて先生方が学会で発表する姿を見せたことも大いに役立った。

大学教員は教育者としての顔だけでなく研究者としての顔も持っていること、また、今回は初年次教育ということで自分たちの身近な問題が取り上げられ、真摯に議論する姿に興味を覚えると同時に感動したようである。

【謝辞】

ゼミ活動のテーマとして「学生サポートアプリケーションの提案」を取り上げたグループがおり、夜の懇親会で多くの先生方にころよくヒヤリングに応じて頂き大変参考にさせていただいた。これはせっかく入った大学なのに大学生生活に馴染めない1年生に対して先輩学生として何か手助けできないかと考えたのがきっかけで研究が始まった。主に「初年次の不安や悩みの解決」、「人との繋がりを築く」という2つに焦点を当て、充実した学生生活を送ってもらうためのスマホのアプリの提案である。この研究を通じて私自身も学生達も一番気になっていたのが、便利なアプリを使うことで1年生の自ら一歩踏み出す力を阻害してしまうのではないかとということであった。機能についてのヒヤリングは勿論だが、この点を多くの先生方にお聞きすることができたのはありがたかった。結論として、確かに積極性を阻害する面もあるが、それでもマイナスの状態から少しでも引き上げることができるのであればやらないよりやった方が何倍も良いということである。この意見をお聞きしたことでその後自分たちの提案を自信を持って進めることができた。その後、アプリケーションの開発はコラボする予定だった企業の社内事情でまだ制作に至っていない。何とか開発できるよう頑張っていきたいと思っている。そして、この研究を発表した前述のインナー大会では予選153チーム中準決勝へ進む20チームの中には入れたものの決勝の10チームには残れなかった。残念だが学生達にとっては自分たちの研究を多くの先生方に聞いて頂きご意見を頂いたことはかけがえのない財産になったに違いない。紙面を借りて感謝申し上げたい。

すでに紀要第5巻に海老澤大会実行委員会委員長のコメントが掲載されておりますが、懇親会での学生さんたちの活動が大変興味深かったため、実行委員会委員としてのご感想とインタビューの成果について、新田先生にご寄稿をお願いいたしました。ありがとうございました。海老澤信一先生、実務を担った絹川直良先生、新田先生をはじめ、文京学院大学の教職員の皆様に、そして学生さんたちには、初年次教育学会の大会運営にご協力をいただきましたこと、改めて御礼申し上げます。（広報）

6. その他 賛助会員による広告添付について

賛助会員には、年1回、会員への情報提供の際に、無料で1ページ分の広告添付が認められております。本学会ニュースレターでは昨年度第5号より、それまでのメール添付ではなく、学会ウェブに本文（このファイル）および広告データを掲載することにいたしました。

なお、学会および学会事務局は、これらの広告内容に関与しておりません。

※ 引き続きニュースレターに掲載すべき実践事例や事例紹介などを募集しております。学会事務局にお

お知らせください。

(編集 広報・情報化担当)

(2013年3月22日第1版公表)

(2013年3月27日第2版 出版社名を修正いたしました。大変失礼いたしました。 担当)